

代表作⑤ 時代小説

日本文藝家協会編



日本文藝家協會編

代表作時代小説

第五卷

編纂委員

十返 肇

富田常雄

吉田健一

村上元三

山岡莊八

東京文藝社

代表作時代小説 普及版
第五卷 九五〇円

昭和五十三年九月十五日発行

編纂者 日本文藝家協会
発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社
本社 東京都新宿区大久保二六三
出張所 東京都新宿区弘方町一番地
振替・東京六一二七五七
電話・(二六〇)二五五〇

0093-789805-5170

無検印承認

まえがき

時代小説を読むのはうれしい。遠い昔の人間と、現代人の違ふところ似たところが興味をもつて理解することができる。長篇にくらべて短篇は、作家としての苦勞も多いであろうが、それだけに圧縮感があり、作家の才能のみせどころでもある。

今度の選衡は、非常に順調に運んだが、それだけ佳作が多かつたからであつた。全体として戦前の時代小説よりもキメがこまくなり、人間の追求が「時代」という限られた枠のなかで、いきいきと描けていると思われる。時代小説は、たしかに向上しつつあるという手答えを、この一冊は感じさせる力をもつている。

また、これから時代小説を書こうとする人々にとつて、よいお手本ともなるであらう。

昭和三十四年七月

目 次

川村権七逐電	井上靖	三
賊將	池波正太郎	三
怪異石仏供養	石川淳	五
町奉行再び	土師清二	宅
横浜租界	長谷川伸	八
火術師	新田次郎	二二
男色のすすめ	富田常雄	二三
坂崎出羽守	海音寺潮五郎	二五
開化シバテン	田岡典夫	一五
さみだれ草紙	中山義秀	一八
復讐鬼	南條範夫	一五
お庭番状	村上元三	三七
天皇の母系	村雨退二郎	三九

五	両	金	心	中	山	岡	莊	八	三
尺	八	乞	食	山	手	樹	一	郎	三
そ	の	木	戸	を	通	つ	て	山	本
在	五	中	将	今	東	光	三	五	三
千	姫	桜	有	吉	佐	和	子	三	三
汁	粉	屋	善	兵	衛	阿	川	弘	之
宵	月	物	語	子	母	澤	寛	三	五
生	木	彫	り	江	崎	誠	致	三	五
あ	か	ね	円	地	文	子	三	五	三
狂	歌	師	平	岩	弓	枝	三	五	三

ま え が き 十 返 肇
あ と が き 吉 田 健 一

川^{かわ}
村^{むら}
権^{ごん}
七^{しち}
逐^{ちく}
電^{でん}

井

上

靖

作者のことは

井上靖

「川村権七逐電」は、長い間持つていた材料であつたが、書くのは非常にあわただしく書いた。仕事が続つた重なり、締切日が一遍に押し寄せてしまつた時で、発表誌の「週刊朝日別冊」がそれにぶつかり、係りの中川氏に何回も足を運んでいただいたと思う。

この作品の主人公、川村権七のことは、「関ヶ原軍記大成」巻の十に出ている。「関ヶ原軍記大成」は、江戸初期の兵学者、宮川尙古の著であり、関ヶ原合戦の始末を記したもので、いろいろ面白い話が収録されている。

川村権七は恐らく実在した人物であり、この小説に取扱つた話は実際にあつた話であらうと思う。

時代小説としては、この作品は非常に書きやすかつた。主人公と加藤嘉明の室との関係はフィクションであるが、このような事件を想定しないと、川村権七の逐電がどうしても私には理解できなかったからである。

著者略歴

本名 井上 靖

明治四十年五月六日 静岡県生

世田谷区世田谷四ノ四一〇

昭和二十四年「文学界」十月号に「狼銃」発表

昭和二十五年「闘牛」にて芥川賞受賞

昭和三十三年「天平の薨」にて芸術選奨文部

大臣賞受賞

昭和三十四年「氷壁」その他にて芸術院賞受賞
主な作品は「狼銃」「闘牛」「風林火山」

「ある偽作家の生涯」「嫉捨」「黒い蝶」

「氷壁」「射程」「異域の人」「天平の薨」

「棲蘭」等

(現住所)〒156 世田谷区桜三・五・一〇

秀吉が薨じたのは慶長三年八月である。それからようやく二年の歳月が経とうとしていた。武士たちにも、百姓町人たちにも、この二年はひどく長く思われた。いつ、どこで合戦が行われても、いつこうに不思議でないような緊張した息詰まるような空気の中に、二度の春と二度の秋が過ぎ、いま三度目の慶長五年の夏が回り来ようとしていた。

秀吉の死後、秀吉に替つて家康が急にその存在を大きくし、大坂城には秀吉の嗣子秀頼はあつたが、政権は全く家康の手に収められていた。しかし、この家康の抬頭を快しとしない石田三成を中心とする大きい勢力があつて、家康を除く機会を、虎視眈々とねらつていた。この二大陣営が早晚衝突を免れ得ない情勢にあることは、この時代を生きたたれの眼にも明らかであつた。合戦が明日に始まつたとしても、それを異とするには当らぬ情勢にあつた。

こうした大きい危機をはらんでいる時期に、家康は自分の敵対勢力の一翼である会津の上杉景勝討伐の軍を起したのである。この家康の行動はある者には大胆に、ある者には無謀に映つた。いつ合戦が起るか判らぬ不穏な空氣が渦を巻いている京坂の地を離れて、遠く東北にお

もむこうとするのであるから、合戦をひき起す機会を自ら相手に与えているとしか思われなかつた。

家康が京坂地区に駐屯している武将たちの一部に出陣の令を発し、麾下の將士三千を率いて大坂を発したのは六月十六日である。十七日には伏見城に入り、その留守を鳥居元忠に命じ、十八日に伏見を出て一路江戸に向つた。そして七月二日には江戸にはいつた。

家康が東上したあとの上方一带は、家康が居た時より一層不気味な状況を招いた。物騒な風評や臆測は日夜乱れ飛び、町人たちは緊迫した空氣に追いつたてられて、続々と避難し始めた。毎日のように家財道具を車に載せたり背負つたりした群衆が、淀川の堤に長い列を作り、また大和や丹波へ通ずる街道を埋めた。

こうした時、大坂の城下で一つの事件が起つた。それは家康に従つて上杉景勝討伐に参加した細川忠興の室が、大坂の留守屋敷において、人質として大坂城に入ることを命じられるや、それを拒んで自害したという事件であつた。

この噂は、それだけでなくさへ混乱状態にある城下を、一層大きい混乱に陥れた。これを聞いたものは、やはり合戦は近いのだという確信を強くした。

家康の命で家康と共に東に向つた武将たちは、もし家康と石田三成との間に戦端が開かれれば、好むと好まざ

るに拘らず家康方につかなければならなかつた。これは自然の成行であつた。そうしたことを牽制するために、東上將士の家族の者を一応人質として大坂城内に留め置くことは、これまた大坂方の当然の措置と言えた。その最初の犠牲者として自らの生命を断つたのが、細川忠興の室であつた。

この事件は、どこまでが真実であるか判らなかつたが、かなり詳しくまことしやかに伝えられた。忠興の室は石田三成から城内に移るようという話があつた時、いつたんそれを断つたが、再度の勧めを受け、弓鉄砲を持つた物頭が与力同心を引連れて自分の屋敷を取り囲むのを見た時、いまは免れ得ぬものと覚悟して、忠興の居間にはいつて自刃して果てたのであつた。留守を預かつた武士たちは屋敷に爆薬をしかけ火を点けておいて、彼等もまた自害して相果てたということであつた。それから内室が明智光秀の娘であるということも手伝つて、父娘二人の非業の死は、因果ものめいて怪しく潤色されて噂されたりした。

しかし、この細川忠興の内室の自刃事件から、最も強い衝撃を受けたのは、忠興と同様に家康に従つて東上している他の武將たちの留守屋敷であつた。明日にも同じ運命が自分たちの上にも及びかねなかつたからである。そして、それぞれに大坂屋敷の留守を託されている武

士たちは、自刃の覚悟を固めたり、内室を大坂から脱出させて、それぞれの所領へ送ることを計つたりした。しかし、大坂を脱するということは容易なことではなかつた。大坂の城下へはいることも、またそこから出ることも、厳しく詮議された。海陸とも道という道は処々方々の番所で堅固に固められてあつた。

当時東国に出陣し、留守屋敷を大坂に持つている者に、加藤清正、黒田長政、有馬豊氏、加藤嘉明、池田輝政などがあつた。

加藤清正は平素三成と仲が悪く、三成が大坂屋敷に居るその室を人質として強要することは火を見るより明らかなことだつたので、大木土佐という者が、人改めの番所の眼をかすめて、内室を密かに屋敷より連れ出し、大きい水桶を二重底にして、その下方に内室を匿し、上に水を張つて、船で豊後の国へ送り届けたのであつた。

また黒田氏の留守屋敷も大騒ぎであつた。当時黒田如水は豊前中津に在城し、その子長政は東国へ従軍中で、その大坂の屋敷には父子それぞれの室が留守を守つてゐた。如水、長政ともに家康方に与してゐたので、二人の室の立場は頗る危険なものに見られた。細川忠興の室が自刃したその夜、二人の室は家臣の計らいで、屋敷を出ると、一時町人の家にかくまわれ、それから福島堤に逃れ、途中から船に乗つて川口へ出て、再三の詮議にも拘

らず危く虎口を脱して、中津へ帰郷することができたのであつた。

しかし黒田、加藤の阿留守屋敷の場合はどうにかうまことが運んだが、他はこれようには行かなかつた。

細川忠興の内室の死の抗議の結果、大坂方の留守屋敷に対する措置はいくらか緩和された。その動静はきびしく監視されたが、武力を以つて人質を城内へ移そうとすることだけは止められた。

しかし、留守家族の者の不安は同じだつた。そうした処置も一時的なものであるに過ぎず、事情がもつと切迫すれば、いかなる魔手が彼等の上にふりかかつてくるか知れなかつた。

東国出陣中の加藤嘉明は、領国である伊予松山の城に、弟の内記と、堀部主膳、佃次郎兵衛、黒田九兵衛などの武將を置き、大坂の屋敷には内室とわずかな武士たちを置いてあつた。

細川忠興の内室の自刃の報せが、松山に届いたのは、事件があつてから十日ほど後のことであつた。大坂の留守屋敷から、内室をいかにするかの措置を仰いで来たものであつた。

城内では直ぐに内記を中心に、それに対する評定が開かれた。何はともあれ、一刻も早く大坂屋敷から内室を連れ出すことが急務であると思われた。そして協議の

末、黒田九兵衛がその大任を帯びて、その夜のうちに松山城を発ち、大坂に向うことになつた。

黒田九兵衛がその居宅に戻つた時は、既に夜になつてゐた。彼は家臣一同を庭に集めて、自分と行を共にして大坂へ赴き、生命を棄てる覚悟で内室を連れ出す仕事をする者はいかと言つた。三十人ほどの武士たちが居並んでいたが、だれも固く口を結んだまま、この仕事に応じようと言ひ出す者はなかつた。

「たれかないか」

再び九兵衛が言つた時、

「私がお供いたします」

と、後の方で言つた者があつた。川村権七だつた。権七は人並外れて大きな体と、同じく人並外れた大きな眼玉とを持つていた。その上彼は無双の大力と、少しのことでもかつとする頑癪とを持つてゐる二百石取りの若い武士だつた。容貌は魁偉で、老けて見えたが、年齢はまだ二十歳をどれほど出て居なかつた。

「川村権七か」

九兵衛は篝火に照らし出された若者を見詰めながらうめくように言つた。必ずしも適任と思われる人物ではなかつた。合戦で先駆けさせるには打つてつけの人間と言えたが、ひそかに大坂城下に忍び込み、内室を脱出させるというような仕事には、どう見ても適任者とは言えな

かつた。

「たれか他にないか」

九兵衛が言うと、

「拙者では不適格だと仰せられるか」

権七は大きな眼をむいて怒鳴るように言つた。

「いや、そういうわけではないが、他に申し出る者があれば、その中から一人を選ぶ」

九兵衛はいつて、権七以外に申し出る者のあるのを待つたが、だれ一人名乗りをあげる者はなかつた。九兵衛としては、他に一人でも希望者があれば、その者を自分と同行させるつもりだつた。それがだれであろうと、癪癪持ちの大男よりましのように思われた。

しかし、いつまでたつても名乗りをあげる者がなかつたので、

「権七、すぐ出立の支度をせよ。今宵のうちに船に乗る」

九兵衛はいつた。彼は不機嫌になつてゐた。

「かしこまりました。しかし拙者別に支度などない。このままでも発てます」

権七は言いながら、自分の顔が自然にはころんで来るのを押えるのに骨折つた。松山の城下など、これで見おさめだと思つた。

川村権七はもとと親の代からの加藤家の家臣ではなかつた。生れは大和で、十五歳の時大坂に出て、加藤の

陣屋に雑役として使われていたが、多少物好きなどところのある嘉明に、その大力と豪胆さと異相とを買われて、武士に取り立てて貰つたのであつた。

権七は他の家臣のように、自分を武士として召し抱えてくれたという一事を除けば、別に加藤嘉明に恩顧は感じてゐなかつた。自分ぐらいの大力と豪胆さを持つていれば嘉明でなくてもだれでも武士として取り立ててくれるはずだと思つてゐた。

権七は嘉明と一緒に東国へ従軍したかつたが、どういふものか選に洩れて留守部隊に回され、松山に移されたが、彼はかねがねそのことを不満に思つてゐた。

権七は、九兵衛から、上方が騒然として、いよいよ合戦が近く始まるらしいということを聞くと、自分の任務がなんであれ、ともかく上方へ出たいと思つた。上方に出ていないと、自分が当然つかみ取つていはずの大きい幸運を逃してしまひそうな気がした。

権七は必ずしも加藤家に仕えていなければならぬということとはなかつた。合戦に参加させ、自分の力柄を十二分に發揮させてくれる者なら、自分の主が石田方であろうと、家康方であろうとどちらでもよい事だつた。

合戦！ 合戦！ 権七はよく口の中でつぶやくように言つたが、実際に常に合戦だけが、この多少無考えな若者を呼んでゐた。

九兵衛は船に乗る前に、権七にさすように言った。

「この度は大変な任務を帯びての東上である。よく承知しているであらうな」

「承知しております」

権七は答えたが、実のところはいつこうに承知している訳ではなかった。内室を運び出すとか、出さないとか聞いたようだったが、そんなことは心に留めていなかった。彼の東上の全目的は、なんとかして大坂城下へはいり込むという一事であつた。万事はその上であつた。そこには合戦と幸運が、彼を待ち受けているに違いなかつた。自分はそこで恐らく新しい主君を見つけて、すぐ合戦に加わるであらうと思つた。

松山を船出した黒田九兵衛と川村権七は、何日かを海上で過して摂津の尼ヶ崎に上陸した。大坂へ通ずる街道には、ひっきりなしに武士たちの集団が移動していた。既に合戦は始まつていてのではないかと思われるくらいであつた。

九兵衛はひとまず知人の商家に身をひそめて、そこで大坂の情勢を聞き取ることにした。大坂の川口には番船をかけて、出入する船を尽く取り調べているということが判つた。そしてまた近日中に家康方につくと思われる武將の領国の城々にも人数を差し遣わすという噂が専らであつた。尼ヶ崎の街道を武装した軍勢が西へ向つてい

るのは、恐らくそのためであらうと思われた。

黒田九兵衛は合戦がついそこまで来ているのを感じた。松山で考えているようなのきなものではないと思つた。

尼ヶ崎に着いた翌日、九兵衛は内室のことも大切であるが、それよりむしろ、自分は急拠松山に帰り、合戦の準備をしなければならぬと思つた。領国を預かつている身として、国を守ることにの方がいまや九兵衛には大事と思われた。内室を救い出すためにここに何日も滞在しているわけには行かなかつた。そこで九兵衛は権七に向つて、

「お前と二人で、事なく川口を経て大坂へはいることは到底望み得ない。自分はこれから直ぐに松山へ帰り、内記殿と図つて御領地を守る手筈を調えなければならぬ。お前はここに暫く逗留して様子を見、便宜を得て大坂にはいり、内記殿の御所存を奥方にお伝えしてほしい。もし脱出が不可能なら、お屋敷の御門を固め、最後まで御奉公せよ」

と言つた。

「承知仕りました」

権七は答えた。その方が、権七にとつては有難いことであつた。

黒田九兵衛が松山へ引返すために再び船に乗り込んで

から数日間、権七は尼ヶ崎の商家に留まつてひそかに大坂にはいる機をねらつていた。幸いその逗留中に、権七は近所の漁師と親しくなり、漁師に金子を見せて、なんとかして大坂城下へはいりこむ道はないものだろうかと相談した。

漁師は初め命にかかわるその相談に乗つて来なかつたが、二日目になつて漁師の方から、

「ひとつやつてみましょう」

と言つて来た。金にひかれて、一晚考え抜いた結果であるらしかつた。

話が決まるとすぐその晩の中に、尼ヶ崎の浜から漁師の船に乗り込んだ。やがて船が大坂に近着き、川口近くさしかかつた時、権七は船底に積み込んである網の下に身をかくした。

船は番所で、二人の武士によつて隅々まで改められたが、よもや網の下に人間がひそんでいようとは武士たちも思わなかつたらしく、船は無事そこを通過することができた。船底に積まれてある網は非常な重量で、とても普通の人間では支えていられるものではなかつた。普通の人間なら一度に押潰されてしまふはずであつた。

番所を過ぎて二、三丁廻つたところで、船頭は上から順に網を取りのけて行つた。さすがに権七は船底に潰れたように俯伏したまま、暫くは起き上がれないほどくた

たになつていた。

やや経つて権七は身を起すと、いきなり、

「かたじけない、合戦、合戦！」

と言つた。漁師はびっくりして権七の顔を見詰めた。

陸へ上がつた権七は、さてどこへ行こうかと思つた。

しかし、考えてみると、ひとまず加藤嘉明の屋敷へ行くより仕方がなかつた。そこへ行けばさしあたつて食べることと、ねぐらにありつけることだけは確かであつた。

権七はその夜のうちに嘉明の留守屋敷を探して訪ねて行つた。屋敷には二、三十人の武士や男女の下人たちが居て、権七を松山からの使者と知ると、いずれも蘇生したような表情して、彼を取り囲んだ。

やがて権七は局の前へ呼び出されると、衣服を改めさせられて、奥の部屋へ導かれた。

権七は長い時間、微かに芳香の匂う部屋で待たされた。部屋は中庭に面していて、夏のこととて襖は一枚残らず開け放たれてあり、庭の植込みの影に灯籠の灯が点されてあつた。

尼ヶ崎へ上陸して以来、常に合戦の匂いの濃い中に身を置いていたせい、権七は今坐つている自分の場所が、ひどく場違いな、自分とは無縁な場所に思われた。

考えてみると、この屋敷へはいつてからでも、局はじめ留守を預かつている武士や下人の全部が合戦をその表